

純粹理性の第一及び第二誤謬推理について

—『純粹理性批判』第一版に従って—

松本長彦

はじめに

カントが『純粹理性批判』⁽¹⁾の「超越論的弁証論」に於いて、カント以前の伝統的形而上学が陥った根拠を欠いた様々な主張に対して、否定的な回答を与え、理性批判を踏まえた新たな根拠づけの必要性和その可能性とを説いたことは、よく知られている。カントはこれによって、伝統的形而上学の中でも特殊形而上学 (metaphysica specialis) と位置づけられていた「心理学」[魂論] (psychologia) ・「宇宙論」 (cosmologia) ・「神学」 (theologia) の主張のほとんどを批判的に解体してしまつたと言つてよいであろう。同時代の通俗哲学者モーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-86) の「すべてを粉碎する者」 (Alleszerstörer)⁽²⁾とカントを評した言葉は有名である。

本論文に於いては、特に「心理学」[魂論]に関するカントの批判的考察を、まずは『純粹理性批判』第一版 (一七八一

年)の論述を丁寧に通ることによって、明らかにする。紙幅の都合で、今回はその前半部即ち「第一誤謬推理」と「第二誤謬推理」を取り扱うことにする。

一、純粹理性の第一誤謬推理(実体性の誤謬推理)に

ついて

第一の誤謬推理 (Paralogismus)⁽³⁾は、思惟し認識する私を、「魂」(Seele; anima)と伝統的に呼ばれる「実体」(Substanz)であるとする伝統的形而上学の主張に対する批判として展開される。カントはまず、従来の形而上学(理性論的心理学或いは超越論的心理学)の主張を三段論法の形で示している。

〔大前提〕その表象が、我々の諸判断の絶対的、主語であり、それ故或る別の物の規定として使用されえないところのものは、実体である。

〔小前提〕一つの思惟する存在者としての私〔自我〕は、すべての私の可能的諸判断の絶対的主語であり、私自身はこの表象は、何か別の物の述語として使用されることはできない。

〔結論〕それ故、思惟する存在者（魂）としての私は、実体である。

（A348. 「」内は筆者補足。以下同じ。）

そして、この推理が誤謬推理であることをカントは明らかにする。それは、

「超越論的心理学の第一の理性推理は、それが思惟の恒常的論理的主語（das beständige logische Subjekt des Denkens）を属性の實在的主語〔主体・主観〕の認識（die Erkenntnis des realen Subjekts der Inhärenz）と称することによって、我々に単に或る思い誤られた新たな見解を信じ込ませるにすぎない、ということである。」（A350）

という文に端的に表されている。批判の要点は、「私」（Ich）の表象は確かに思惟に於いて必ず現れるが、それを「実体」として認識するために必要な直観は与えられない、ということである。

「というのは、私〔自我〕は確かにすべての思考に於いて存在する。しかし、この（私という）表象には、私〔自我〕を直観の他の諸対象から区別する些かの直観も結び付いていないからである。それ故、この（私という）表象があらゆる思惟に際して繰り返し現れる、ということは確かに知覚されることはできる。しかし、その私〔自我〕が、そこに於いて思考が（変転しうるものとして）変易するところの留まり続ける直観である、ということとは知覚されえないのである。」（A350）

このように、カントの批判のポイントは、「私が思惟する」〔Ich denke〕はあらゆる私の表象に伴いえなければならぬ（そうでなければ、表象は私の表象として意識されない。Vgl. B 131f.）のであるから、私が何かを意識する時には、その「考える私」の表象（自己意識）が必ず現れる。しかし、それはあくまでも意識或いは思惟に於ける表象であって、対象の直接的表象である「直観」ではない。それを無視して「私の意識」を「私の直観」とすり替えるところに「誤謬推理」が成立する、ということである。

つまり、最初に示した三段論法を単純化すると、

〔大前提〕「絶対的主語は実体である。」（MはPである。）

〔小前提〕「私は絶対的主語である。」（SはMである。）

〔結論〕「故に、私は実体である。」(故に、SはPである。)

となるが、このM(つまり媒概念として使われている「絶対的主語」(das absolute Subjekt))が問題である。

「大前提」では、「主語となつて、述語となり得ないものが実体である。」というアリストテレス以来の「実体」の定義が語られてゐる。A350^b「属性の實在的主語」(主体・主観)〔das reale Subjekt der Inhärenz〕と言われるものがこれに当たる。これは、「属性の實在的主語」と言われるように、具体的な「何々である」という性質の担い手と考えられるものである。しかし、それが性質の担い手であることを根拠づけるためには、その性質を示してくれる「直観」と結び付くことが必要である。つまり、大前提で語られる「絶対的主語」は、直観と結び付いて何らかの性質の担い手となることができる主語(＝主体)である。つまり、アリストテレスが「主体」(ὑποκείμενον)と呼び、ラテン語で substratum と訳され、それとほぼ同義で使用された subjectum、即ち「下で支えるもの」という意味を担った語である「主語・主体・主観」(Subjekt)の伝統的な語義に於いて使用されている語である。これに対して「小前提」で語られているのは「思惟の恒常的論理的主語」、つまり全ての私の意識に伴っている「私が思惟する」(Ich denke)〔これは実は「私が何々を思惟する」

(Ich denke etwas、或いは Ich denke, daß ...) という形をとつてゐる〕という働きの主体である(従つて常に「私が何々を思惟する」の主語の位置にある)「私」の表象である。この働きの主体は、確かに自己意識に於いてはその同一性が常に意識されるのであるが、それが具体的にどのようなものであるかを示してくれる「直観」と結び付いてはいない。「思惟」は「直観」ではないというのが、カントの基本的な立場である(vgl. B 157)。つまり、小前提で語られる「絶対的主語」は、直観と結び付いていない単なる思惟でしかない主語である。

従つて、同じ「主語」(Subjekt)という語で語られても、大前提に於ける「主語」と小前提に於ける「主語」とは、概念内容が異なることになる。従つて、記号表記する場合も、単に「M」ではなく「M₁」「M₂」と表記されるべきものである。そうすれば、「M₁はPである。」「SはM₂である。」と言われても、そのまますんなりと「故に、SはPである。」とは言えないことが分かるであろう。これが所謂「媒概念曖昧の虚偽」(Sophisma figurae dictionis) (B 411)⁶⁰である。

カントは、従来の形而上学がこのような推理の誤謬を犯していることを指摘し、「魂の実体性」(die Substantialität der Seele)に関する従来の主張を批判したのである。

二、「純粹理性の第二誤謬推理」(單純性の誤謬推理) § 351

次に、「魂の單純性」(die Simplizität der Seele) に関する伝統的形而上学の主張は、以下のようなものである。

「その働きが多くの働く諸物の連合〔競合〕(die Konkurrenz) とは決して見なされえない物は、單純 (einfach) である。」

さて、魂は、或いは思惟する私〔自我〕(das denkende Ich) は、そのような物である。それ故、云々〔魂は單純である〕。(A351)

カントによれば、この主張の元になる推理は次のようなものである。即ち、合成された (zusammengesetzt) (＝單純でない) 実体の偶有性や働きは、その実体を構成する多くの諸実体に分配されて存在する。これは、例えば物体の運動に於いては可能であり、現に力学に於いては「合力」(resultant Force) として取り扱われている。しかし、思惟する存在者に於いてはそれは不可能である。もし思惟する存在者が合成された実体であるとしたら、その思考の各部分が、実体を構成する諸実体に分散して存在することになる。しかしその場合には、一つの全体的思考というものが存在しないことにな

る。従って、思考は或る合成されたものの働きと考えることはできない、と云う推理である (vgl. A351-352)。

ここでの推理法は、所謂背理法である。実体が「單純である」の反対は実体が「合成されている」であり、この二つは矛盾対当関係にある。従って、「魂は合成された実体である」が否定されれば、必然的に「魂は單純な実体である」が帰結する。

そこで伝統的形而上学は、思惟 (思考) が合成された実体に於いて可能であるか、ということ問いかける。そして、合成された実体に於いては思考は不可能であるということを出して、思考がその働き或いは偶有性として内属するところの実体 (思惟する存在者) は、複合的実体であることはできず、單純な実体であるという推理を行っているのである。

合成された実体は思惟することはできない。
魂は思惟する。

故に、魂は合成された実体ではない。即ち單純実体である。

これが、伝統的形而上学が行う誤謬推理である。

二一、理性論的心理学の第二誤謬推理の核心命題につ

つ

カントは、理性論的心理学 (die rationale Psychologie; die rationale Seelenlehre) (7)の章では「超越論的心理学」(die transzendente Psychologie)とも言われている)の行う「魂は単純である」(Die Seele ist einfach.)を導き出す推理に対して、次のように批判する。

まずカントは、理性論的心理学が行う推理の核心にあるのは、「一つの思考を構成するためには、多くの諸表象は思惟する主観の絶対的統一の内に含まれていなければならない。」(A 352)という命題であることを指摘する。これが「主要論拠」(nervus probandi)即ち伝統的形而上学の「核心命題」である。

しかしカントは、この命題は「諸概念に基づいて aus Begriffen」(つまり概念の分析によって分析的 analytisch に)証明されることもできなく、「経験に基づいて aus der Erfahrung」(経験的 empirisch に)証明されることもできな

二一、分析的証明の不可能性について

まずカントは、「しかしこの命題を誰一人として諸概念に基づいて証明することはできない。」(A 352)と言う。その理由は、「或る思考はただ思惟する存在者の絶対的統一の結

果でのみありうる」という命題は、分析的なものとして取り扱われることはできない。」(A 353)からである。

「というのは、多くの諸表象から成立する思考の統一は、集合的 (kollektiv) であり、その統一は、単なる諸概念から見れば、主観の絶対的統一 (die absolute Einheit des Subjekts) に関係しうるのと同様に、そこで共に働いている諸実体の集合的統一 (die kollektive Einheit der daran mitwirkenden Substanzen) にも関係しうる (或る物体の運動がその物体のすべての諸部分の合成された運動であるように) からである。それ故、同一性の規則に従っては、或る単純な実体を前提する必然性は、或る合成された思考の場合には、洞察されえない。」(ebd.)

つまり、「或る一つの思考」(ein Gedanke) が成立しているからと言って、その思考がもつ「同一性」(Identität) から「主観の絶対的統一」(die absolute Einheit des Subjekts) = 「単純性」(Einfachheit) が導き出されるわけではない。何故なら、その一つの思考はいくつかの複合的な働きが集合して成立している、という説明方式を排除できないからである。従って、「一つの思考」(ein Gedanke) という概念を分析してみたところで、必然的に主観の絶対的統一という概念が出てくるわけではない、というのがカントの主張である。

二一—二、経験的証明の不可能性について

さらにカントは、経験的にも証明できないことを指摘する。

「さてしかし、各思考の可能性の制約としての、主観のこの必然的統一を、経験から導き出すことも不可能である。というのは、経験は如何なる必然性をも認識せしめないからである。いわんや、絶対的統一という概念は経験の圏域をはるかに超えている。」(A353)

元来「経験」(Erfahrung)は「必然性」(Notwendigkeit)を教えない(vgl. B34)。経験の圏域の何処を探しても、必然性を導き出せる根拠はない。また同様に、経験は「絶対」(absolut)ということも教えない。これは、カントがヒューム(David Hume, 1711-1776)から学んだ最大のことと言える。ヒュームが強調したのは、経験論(empiricism)の立場(認識の唯一の源泉は感覚的経験であるとする立場)を徹底すれば、「今まで経験した範囲では、これこれである」と言えるだけで、「必ず」或いは「絶対的に」「これこれではなければならない」とは言えない、ということであった。「必ず」≡「必然性」や「絶対的に」≡「絶対的」という観念は、我々が同じようなことを度々経験したという「習慣」(custom)に基づいて、想像力(imagination)が産み出した「信念」

(belief)によって作られたものすぎない、というのがヒュームの主張であった⁸⁾。カントの批判哲学の出発点の一つとなったヒュームの考え方が、ここではそのまま使われていると言ってもよいであろう。

このように、概念の分析(大陸の理性論 Continental Rationalismのやり方)によっても、経験(イギリス経験論 British Empiricismのやり方)によっても、「一つの思考を構成するためには、多くの諸表象は思惟する主観の絶対的統一の内に含まれていなければならない。」(A352)という命題を基礎づけることはできない、ということのカントは明らかにしているのである。

二一—二、核心命題の来歴

——思惟主観の認識客観へのすり換え

そこでカントは改めて問いかける。

「いったいどこから我々は、心理学的理性推理全体がそれに依拠しているこの命題を採ってくるのであろうか。」(A353)

その答えは明白である。

「()でも先ほどの誤謬推理とまったく同様に依然とし

て、私は思惟するという統覚の形式的命題 (der formale Satz der Apperzeption: Ich denke) が、それに基ついて理性論的心理学がその諸認識をあえて拡張しようとするすべての根拠である。この命題は、確かに如何なる経験でもなく、むしろあらゆる経験に属しあらゆる経験に先行する統覚の形式であるが、それにも拘わらず、常に或る可能的認識一般に關してのみ、その認識の単に主観的な制約と見なされねばならない。この主観的制約を我々は不当にも、諸対象の或る認識の制約に、即ち思惟する存在者一般の一つの概念にするのである。何故ならば、我々は、我々の意識の定式でもって我々自身をあらゆる他の知性的存在者の代わりに立てることなしには、この思惟する存在者を表象することができないからである。」(A 354)

「私は思惟する」(Ich denke) という「根源的統覚」(die ursprüngliche Apperzeption) の「自発性の作用」(ein Aktus der Spontaneität) (B 132)「これは「自己意識」(Selbstbewußtsein)の働きそのものであるが、それを対象化し、それについての認識が成立すると誤認するところに、誤謬推理が生じる。その事情をカントは次のように説明している。

「明白なことは、或る思惟する存在者 (ein denkend

Wesen) を表象しようと思う場合、人は自己自身をその〔思惟する存在者の〕位置に置かねばならず、それ故に、考量しようとする客観に自己自身の主観を置き換え〔すり替え〕(unterschieben) ねばならない、ということである。(このことは他の種類の探究に於いてはないことである。)」(A 353f.)

つまり、我々は「思惟する存在者」を直観する(＝直接的に知る・認識する)ことはできない。これは、他の人が頭の中で(或いは心の中で)何を考えているかを直接的に知ることはできない、という我々の経験的認識(＝経験)からも明らかである。テレパシーのような超自然的能力があれば、それも可能かもしれないが、カントは(そして我々も)そのような超自然的能力は認めない。そうすると、「思惟する存在者」を対象として認識しようとする場合、我々は、自分自身が「思惟する存在者」であるので、その自分自身を対象の位置に置いて考えようとする。しかし、その「思惟する存在者」としての自分自身とは、認識作用の主体としての「私」、即ち「認識主観＝知る者」としての「私」である。「知る者」である「私」を「知られるもの＝認識客観」の位置に置くのは、不当な「すり替え」であるとカントは指摘するのである。何故ならば、「認識客観＝知られるもの」は、私の認識の客観(対象)という身分を得るためには、単に「思惟され

ているもの」であるだけでなく、同時に「直観されているもの」でもなければならぬからである。

上述の引用文に続いてカントは次のように述べている。

「また、我々が主観の絶対的統一を或る思考のために必要とするのは、そうでなければ（或る表象に於ける多様を）私が思惟すると言われえないであろうが故にのみである、ということとは明らかである。というのは、たとえ思考の全体が分割されて多くの諸主観の間に分配されることができたとしても、それでも主観的私〔自我〕は分割されることも分配されることもできず、そしてやはり我々はこの主観的私〔自我〕をあらゆる思惟に際して前提するからである。」(A354)

ここで述べられているのは、認識主観＝知る者としての私をもつ「絶対的統一」である。「私は思惟する」(Ich denke) という自発性の作用は、私の諸表象(意識内容)を全て「同一の私」に帰属させる働きでもある。その際に私は自分自身の「絶対的統一」を意識する。この主観的私〔自我〕(das subjektive Ich) がもつ「分割不可能性＝単純性」を、客観としての「魂」に適用する(客観と主観を「すり替える」ところに、誤謬推理が生じるのである)。

それを端的に語っているのが、A356の段落である。

「私は私〔自我〕によって常に主観〔主体〕の或る絶対的な、しかし論理的な単一性(統一 Einheit)〔単純性 Einfachheit〕を思惟する、ということまでは確實である。しかし、私はそれによって私の主観〔主体〕の現実的単純性(die wirkliche Einfachheit meines Subjekts)を認識する、ということは確實ではない。私は実体である、という命題が、私がそれを具体的二(in concreto)使用する(経験的に使用する)ことができない純粹カテゴリー以外の何ものをも意味しないのと同様に、私は一つの単純実体である、即ちその表象は決して多様の或る綜合を含まない、ということも私に許されてはいる。しかし、この概念は、或いはまたこの命題は、経験の対象としての私自身に関して些かも我々に教えてはくれない。何故ならば、実体の概念自身は、単に綜合の機能として、下に置かれた直観なしに、従って客観なしに使用されるからであり、そして我々の認識の制約については妥当するけれども、何らかの示されうる対象については妥当しないからである。」(A356)

ここでは端的に、カテゴリーは単に「綜合の機能」としては、直観なしにも、従って客観なしにも使用されうる(つまりは我々の諸表象を取りまとめるために使用されうる)ということと、しかし同時に、直観なしには対象については妥当

しない、つまり対象認識には使用できないということが、明確に述べられている。「綜合の機能」としてのカテゴリーの中には「単一性 Einheit → 単純性 Einfachheit」(ここでは「単一性 ≡ 統一」と「単純性」とは交換概念として用いられていると考えてよい)が存在する。そして私は、「私は思惟する」という働きに於いて、常にその「単一性 ≡ 統一」を意識している。つまり「単一性 ≡ 統一」のカテゴリーが働いている。であるから、自己意識に於いては、「私は単純である」ということは成立している。しかし、それはあくまでも「自己意識」に於ける事実であり、「自己認識」ではない。自己認識のためには、自己自身についての直観が必要であり、その直観にカテゴリーが適用されることが必要である。

これが、第二誤謬推理(単純性の誤謬推理)の結論と考えるてよいであろう。つまり、「単純性」の概念は、認識主観としての私には常に使用されているが、認識客観としての私に使用(適用)する根拠(即ち直観)を欠いている。そのような根拠を欠いているにも拘わらず、「単純性の誤謬推理」に於いては、この「単純性」の概念が不用意に使用されている。それ故に誤謬推理である、ということである。

二一三、魂と物質(物体)との区別について

——「それ自体」(an sich selbst)としての区別の不可能性

先ほど引用した段落の最後でカントは、「我々は、この命題の誤つて思い込まれた使用可能性について吟味してみようと思う。」(A356)と述べて、さらに議論を展開している。ここから別の視点での議論が展開する。その別の視点とは、「魂」(Seele)と「物質」(Materie) (これは「物体」(Körper)と言つても同じである)との(デカルト流に言えば)「実在的区別」(distinctio realis: realer Unterschied)の問題である。

ここでカントが指摘しているのは、理性論的心理学(従来形而上学)が「魂は単純である」と主張するのは、魂を物質(物体)とは別の実体だと主張したいからである、ということである。

「すべての人が認めなければならないのは、魂の単純な本性(die einfache Natur der Seele)という主張は、私から区別し、従つて物質が常にそれに支配されている消滅性(Hinfälligkeit)から魂を除外することができる限りでのみ、若干の価値をもつ、ということである。このような使用を上述の命題もまたまったく本来的に目指している。それ故、この命題はまたしばしば、魂は物体的

ではない (die Seele ist nicht körperlich) とも言い表され
 29。」(A356)

そしてカントは、この単純性の誤謬推理によって理性論的心理学が主張する命題「魂は単純である。」がたとえ認められるとしても(実際は対象認識としては根拠のない主張ではあるが)、それを「魂」と「物質」の区別のために用いることはできないことを示すと宣言する。

「さて、たとえ理性論的魂論(心理学)のこの基本命題(dieser Kardinalsatz der rationalen Seelenlehre)に、(純粹カテゴリーに基づく)或る単なる理性判断という純粹な意味に於いて、あらゆる客観的妥当性が許容される(思惟するものはすべて、単純な実体である)としても、やはり、魂の物質との異種性(Ungleichartigkeit)或いは類似性(Verwandtschaft)に関して、この命題を些かも使用することができない、ということを示すことができるならば、このことは、あたかも私がこの思い誤られた心理学的洞察(diese vermeintliche psychologische Einsicht)を、それらには客観的使用の実在性が欠けているところの単なる諸理念の領域へと追放した、という(ソレはソレに同くである)。(A356f.)

この引用の最後の「それらには客観的使用の実在性が欠けているところの単なる諸理念の領域へと追放した」(in das Feld bloßer Ideen verwiesen hätte, denen es an Realität des objektiven Gebrauchs mangelt) (A357) というのは、理性論的心理学が(誤謬推理によって)もっている思い込んでいる「洞察」＝「魂は単純である。」＝「魂は物体的ではない。」という基本命題を、単なる観念(＝思い＝主観的意識内容)にすぎないと切つて捨てることを意味する。単なる観念にすぎないということは、現実的或いは可能的存在者を正しく表すもの(客観的表象＝客観的意識内容)ではないということ、その意味で「実在性」(Realität)〔存在者の存在内容・何であるか〕を欠いた意識内容であることを意味する。つまり、ここで「単なる諸理念」(bloße Ideen)と言われているのは、カントが本来の意味で用いる「理念」或いは「超越論的理念」というよりも、(デカルトやロックが使用する意味での)単なる意識内容としての「観念」(Idea)と考えれば理解しやすいであろう。

カントの論述のポイントは、理性論的心理学の基本命題「魂は単純である。」＝「魂は物体的ではない。」を認めたからといって、それによって「魂」と「物質」の区別が論証されるわけではないということである。

其外、A357-358の段落(Wir haben in der transszendentalen Ästhetik unlenkbar bewiesen: ... zu betrachten angefangen hat.)

でカントは、「超越論的感性論」の成果として、「諸物体は我々の外的感能の単なる諸現象であり、諸物それ自体ではないということ」(A 357)を確認し、それに基づいて「我々の思惟する主観〔主体〕(unser denkendes Subjekt)は物体的ではなく」(ebd.)ことを確認する。何故ならば、「思惟する主観〔主体〕は内的感能の対象として我々に表象されるが故に、その主観〔主体〕は、それが思惟する限りに於いて、外的感能の対象ではありえず、即ち空間に於ける現象ではありえない」(ebd.)からである。つまり、「物体」(Körper)は外的感能の対象であり、「空間」という直観形式に於いて直観される「空間に於ける現象」であるのに対して、思惟する主観は内的感能の対象として表象されるが故に、「空間に於ける現象」ではありえないからである。これをカントは簡潔に、「我々は思惟する存在者たちの思考、それらの意識、それらの欲求等々を外的に直観することはできない」(ebd.)とも述べている。このようにしてカントは、まず「思惟する主観」が「外的現象」としての「物体」とは区別されることを確認する。そして、これは「通常の悟性≠常識」もかなり以前から気づいていたことであり、そのことが理性論の心理学の主張の元となっていることを示唆している。

次に、A 358-359の段落 (Ob nun aber gleich die Ausdehnung, ... in Ansehung des Substrati derselben gar nicht hinreichend unterschieden.) では、かなり大胆な推測を主張する。この箇

所は、カントが元々はライプニッツ・ヴォルフ学派の理性論の立場から出発した哲学者であったことを思い起こさせる箇所でもある。先批判期の『形而上学的認識の第一原理の新解明』(Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio, Königsberg 1755) に於いて展開されていた、ライプニッツのモナド論の影響を受けた、精神的実体を實在的存在者と見なす世界観を彷彿とさせる。そのためか、第二版ではこれに対応する(或いは類似する)ような記述は、見当たらない。

まずこの段落の前半部で主張されているのは、物体は所詮は外的現象であるにすぎないとしても、その現象の根柢として想定される物それ自体は「思惟する主観」と考えることも可能であるかもしれない、ということである。

「さてしかし、たとえ延長、不可入性、連関及び運動が、要するに、我々に外的感能だけが提供しうるすべてのものが、思考、感情、傾向性或いは決断ではなく、或いは総じて外的直観の諸対象ではないようなものを含まないとしても、やはり、外的諸現象の根柢に存する或るもの、我々の感能を触発して、感能が空間、物質、形態等々の諸表象を得るようにさせる或るものは十分に、つまりヌーメノン〔観智体〕として(或いはより適切には超越論的対象として)考察されるこの或るものは、やは

りまた同時に思考の主観〔主体〕でもありうるであろう。とはいえ、我々の外的感能がこの或るものによって触発される仕方によって、我々は、諸表象、意志等々の直観を得るのではなく、むしろ単に空間とその諸規定との直観を得るにすぎないのではあるが。〔A358〕

しかしながら、この「外的諸現象の根底に存する或るもの、……（中略）……ヌーメノン〔観智体〕として（或いはより適切には超越論的対象として）考察されるこの或るものは、やはりまた同時に思考の主観〔主体〕でもありうるであろう。」〔A358〕ということは、確実な根拠のある主張ではない。単にそう考えることも可能であるということにすぎない。であるから、カントはここではきちんと接続法第Ⅱ式（*könnte*）即ち非現実法法を使って、実際にそうだと言っているわけではない、ということを表示している。

しかし、このように外的現象の根拠として「思考の主体」（つまり精神的存在者）を想定することが可能であるとしたら、そのことは「魂」と「物質・物体」との区別を不可能にする、ということを指摘するのが、この段落の後半部である。

「しかし、この或るものは、延長しておらず、不可入的ではなく、合成されていない。何故ならば、これらの述

語はすべて、我々がそのような（その上我々には知られない）諸客観によって触発される限りに於いて、ただ感能とその直観とのみ関係するからである。しかしこれらの表現は、この客観がどのような対象であるのかをまったく認識させてくれない。むしろただ、外的感能への関係なしにそれ自体で考察されたものとしての対象には、外的諸現象のこのような諸述語は付加されえない、ということを経識させるだけである。しかしながら、内的感能の諸述語、つまり諸表象と思惟とは、この或るものに矛盾しない。従って、本性の認容された単純性によつてすら、人間の魂は、それが（そうすべきであるように）単に現象として考察される場合には、魂の基体に関しては物質から十分に区別されないのである。」〔A358f.〕

外的現象としての物体の根拠として想定される「或るもの」〔*Etwas*〕＝「思考の主体？」は、現象と区別される（物それ自体 *Ding an sich selbst* と現象としての物 *Ding als Erscheinung* との区別）が故に、感性的直観によつて（触発の結果として）得られる「述語」（延長・不可入性・合成されている・等々）は、現象としての対象である「物体」に付加される「述語」ではあっても、現象と区別されるこの「或るもの」に付加されることはできない。しかし、本来我々の

「心」(Genit)「現象としての魂」を説明する述語として用いられる「諸表象と思惟」は、その「或るもの」に矛盾しない。当然、「諸表象と思惟」は「心」に用いられるのであるから、「魂」にも用いられる。実はどこでも「魂」(Seele)は両義的に使用されている。現象としての魂には、「諸表象と思惟」という述語は、内的直観を通して正当に付加される。分かりやすく言えば、私は、私が意識内容を持ち、何かを考える、ということを経験する。しかし、現象の根拠として想定される「魂それ自体」には、「諸表象と思惟」という述語は、正当に付加されるかどうかは分からない。しかし同時に、矛盾するとも言えない。何故ならば、少なくとも「思惟」(Denken)は、「私は思惟する」(ich denke)という作用に於いて意識されており、その思惟は意識内容としての「諸表象」に伴っているのであるから、自己意識に於いて意識される「私[自我]」から「諸表象と思惟」という述語は排除されないからである。ただし、「私は思惟する」の「私」が、「魂それ自体」を指し示していることは想定できても、「魂それ自体」であるとは断定できない。これがカントの批判哲学の立場である。その意味で、外的現象としての物体の根拠として想定される「或るもの」と、内的現象としての魂(心)の根拠として想定される「魂の基体」(das Substratum der Seele) (A 359)とは、明確に区別できないことになる。つまり、物体「それ自体」(an sich selbst)と魂「それ自体」と

は区別できないので、魂は物体「物質」と同じ根拠をもつかもれない、それ故「区別されない」。これがこの段落後半部で述べられていることである。

次の A 359-360 § 段落 (Wäre Materie ein Ding an sich selbst, ... sondern einfach ist und denkt.) も、言っていることは基本的に同じである。既に先ほどの段落で述べたことを、整理し直しているだけである。

「物質が或る物それ自体であるとしたら、物質は合成された存在者として、或る単純な存在者としての魂から、徹頭徹尾区別されるであろう。さてしかし、物質は単一的な現象であるにすぎず、その基体は、まったく如何なる示されうる諸述語によっても認識されない。従って、私はこの物質の基体について、たとえその基体が、それが我々の感能を触発する仕方については、我々の内に延長したものとや従って合成されたものの直観を産み出すとしても、その基体はそれ自体で単純である、と想定することができる。それ故にまた、我々の外的感能に関してそれに延長が帰せられるところの実体には、それ自体に於いて、その実体自身の内的感能によって意識を伴って表象されることができるとは存している、と想定することができる。」(A 359)

ただし、このような想定に続いて、カントはさらに大胆な想定をこの段落後半部で述べている。誤謬推理の議論からは、やや逸脱しているとも言える部分である。

「そのような仕方では、或る関連に於いては物的と呼はれるまったく同じものが、別の関連に於いては同時に一つの思惟する存在者であるだろう。その存在者の思考を我々は確かに直観することはできないが、しかしまた現象に於けるその思考の徴候を直観することはできるのである。これによって、ただ魂（特殊な種類の実体としての）だけが思惟する、という表現は廃止されるであろう。むしろ普通に言われているように、人間が思惟する（Menschen denken）、即ち、外的現象として延長しているものとまさに同じものが、内的には（それ自体に於いては）、合成されておらずむしろ単純であり、かつ思惟する一つの主観〔主体〕である、と言われることである。」（A359f.）

ここでは「人間」(Mensch)を両義的実体として描き出している。「人間」は、身体として外的に現象するときには「物体」であり、思惟するという点では非物体的な「魂」である。「合成されていない、単純でありかつ思惟する一つの主観」(ein Subjekt ... was nicht zusammengesetzt, sondern

einfach ist und denkt)は、それ自体に於いては直観されないが、「その思考の徴候」(die Zeichen derselben [Gedanken])を内的直観を通して捉えることが、つまり直観することができるとカントは言う。この思惟する主観としての人間は、身体(物体)としても経験的意識(心)としても現象する、物的かつ精神的な存在者と考えることもできる、とカントは言っているのである。

しかし、カント本来の批判哲学の立場から言えば、ここまです推測し、こう言うことも可能かもしれないと述べるのは、少々行き過ぎであろう。それを反省して、次の段落が語られる。

A 360の段落 (Aber: ohne dergleichen Hypothesen zu erlauben, ... die bloß seinen Zustand ausmachen.) では、上述のような仮説を認めなくても、「魂」という語で「或る思惟する存在者自体」(ein denkend Wesen an sich) (A 360)を意味するとすれば、魂が「物質」(Materie)と「同種」的 (von gleicher Art) であるか? という問い自体が不適切になると言う。何故なら、「物質」は「物それ自体」ではなく、単に「我々の内なる諸表象の一種」(eine Art Vorstellungen in uns) = 「現象」であるにすぎないからである。「現象」(物質)を「物それ自体」(思惟する存在者としての魂)と混同することは許されない。

その次の段落 (Vergleichen wir aber das denkende Ich ... irgend

worin innerlich unterscheidet.) (A 360) では「思惟する私〔自我〕」(das denkende Ich)を、我々が物質と名づける外的現象の根底に存する「叡智的なもの」(das Intelligible)と比較するならば、「我々は、この叡智的なものについてまったく何も知らないが故に、魂はこの叡智的なものと何らかの点で内的に異なっている」と言つてもできない」(A 360) ということを再確認して、カントの批判哲学本来の立場に立ち戻る。

さらに次の段落 (So ist demnach das einfache Bewußsein ... unterschieden werden soll.) も基本的には言つてゐる」とは同じである。

「従つて、単純な意識 (das einfache Bewußsein) は、我々の主観〔主体〕の単純な本性の知識 (Kenntnis der einfachen Natur unseres Subjekts) ではない。我々の主観〔主体〕が、その知識によつて或る合成された存在者としての物質から区別されるべきである限りに於いては。」(A 360)

「単純な意識」は、直観を欠いている場合には、「単純なもの」の認識になることはできない。これがカント哲学の基本である。

次の段落 (Wenn dieser Begriff aber dazu nicht taugt, ... kann

daher unsere Erkenntnis nicht im mindesten erweitern.) (A 360f.) でもそのことが語られている。「魂の単純性」の概念が、私を物体〔物質〕と区別するために役立つ場合でも、人とはかく、「思惟する私〔自我〕、魂(内的感能の超越論的対象に対する或る名称)は、単純である、ということを知つてゐる」(A 360f.)と言いたがる。しかしそれは、「正しい認識の主張ではないため、我々の認識は、そのように言うことによって少しも拡張されない。これもまさにカント的な表現である。

この段で、カントが「我々は、この命題の誤つて思い込まれた使用可能性について吟味してみようと思つて。」(A 356)と言つて、吟味した内容と考えることができるであらう。

二一四「単純性の誤謬推理」の総括

最後の段落 (So fällt demnach die ganze rationale Psychologie ... als einem objektiv gültigen Begriffe, zu gelangen.) (A 361) は「単純性の誤謬推理の締めくくりである。カントは、「単なる諸概念によつて、(ましてやあらゆる我々の諸概念の単なる主観的な形式、即ち意識によつて)、可能的経験への関係なしに、洞察を拓けることを期待することはできない。」(A 361)とつう「一般的な原則を再確認し、「或る単純な本性」(eine einfache Natur)とつう「基本概念」(Fundamentalbegriff) (ebd.) についても事情はまったく同じである」とを確認し

künftigen Metaphysik, Vorrede, AA, Bd. IV, S. 260.)

(8) Cf. David Hume, *A Treatise of Human Nature*, Book 1, Part 3, Sec. 6-8.

(9) ちなみに、この問題についてカントは、『純粹理性批判』第二版の「純粹悟性概念の超越論的演繹」第24節の後半部に於いて改めて「内感のパラドックス」(*das Paradoxe des inneren Sinnes*)として論じている(vgl. B. 155-156)が、ここでは改めて取り扱わない。この問題については、拙稿「カントに於ける内的触発について」『純粹理性批判』§24の「考察」、『哲學』第39集、広島哲学会、一九八七年、三〇―四四頁)参照。

(10) 「我思惟す、ということ (Das: Ich denke) が、あらゆる私の諸表象に伴い、えなければならぬ。というのは、さもなければ、まったく思惟されえない或るものが私の内で表象されるだろうからであり、このようなことは、表象が不可能であるか、或いは少なくとも私にとっては何のもでもない〔無である〕であるかのいずれかであろう、というにまさに等しいからである。」(B. 131-132.)

(原稿受付 二〇二二年一〇月七日 掲載決定 二〇二二年一月一九日)